

小社発行の「看護学事典」の執筆者の皆様は、事典で解説していただいた用語にまつわるエッセイをご執筆いただきます。

楽しく読んじゃう 新★看護学事典

第3回

手指衛生

最も重要で基本的な感染予防の手技である手洗いと手指消毒を包括した用語。

(看護学事典第2版より)

苦い経験とやりがい

矢野 久子 *Yano Hisako*
名古屋市立大学看護学部

1847年、産科医ゼンメルワイスは、分娩介助をする医師が塩素系消毒薬で手指衛生を徹底すると、産褥熱による18.3%もの高い死亡率を3%程度にまで激減できることを実証しました。現在の医療従事者は、感染予防の基本である手指衛生の重要性をもちろん理解していますが、その実践の難しさを実感しているのではないのでしょうか。

私は、看護教員をしながら名古屋市立大学病院でInfection Control Team (ICT)の一員として感染予防対策に携わっています。この看護学事典の『手指衛生』の項には「手指衛生の遵守率を向上させるためには、職員教育と環境整備が重要である(抜粋)」と記しました。ICTの一員として病棟ラウンドをしておりまして、「手洗いうる水が冷たい」「手指消毒薬の容器が空だった」などの些末な理由で手指衛生が実践されないことがあります。一方、看護学生の処置前の手指衛生を見習って、主治医が「ああ、そうだったね」と実践することもあり、手指衛生の遵守向上のための現場の雰囲気をつくることは大切だと思います。

2005年夏、アデノウイルス8型による流行性角結膜炎(epidemic keratoconjunctivitis: EKC)の流行は苦い経験の一つです。

院内での感染者は合計48名(内訳:医師4名、委託職員1名、患者42名、付添い1名)にも上り、病棟閉鎖や救急患者の受け入れ中止など診療機能が大きく麻痺し、看護学生の臨地実習も中止となりました。病棟等を広範囲にアルコール消毒するなど、さまざまな対策を講じて、ようやく流行が終息しました。

EKCに感染した医療従事者は医師のみでしたので、彼らに視覚的に手指の汚染が確認できる装置(グリッターバッグ®)を用いて、手指衛生の講習を実施しました。その際、彼らは指先に残った汚染を見て、「(手指衛生を)していると思っていたけど、できていなかったんだね」という率直な感想を述べていました。

ICT側のアプローチ法をより工夫する必要があったと反省すると同時に、感染を予防するこの仕事にやりがいも感じています。

日本で唯一、看護職だけの
執筆による事典。
待望の第2版ができました。

看護学事典 第2版

A5判 / 横組1200頁 / 2色刷
ISBN 978-4-8180-1601-9
定価(本体6,600円+税)



【総編集】
見藤隆子・小玉香津子・菱沼典子

【内容紹介】
項目語: 約4500語 ← 約500語追加
索引語: 約1万4000語 ← 約2000語追加

★本書は単なる辞典(ことばの解説)ではなく、看護学領域における事典(ことばの解説)として編集しました。

お問い合わせ・販売はコールセンターまで
TEL: 0436-23-3271 FAX: 0436-23-3272
<http://www.jnpsc.co.jp/> 日本看護協会出版会